

〈書評〉

石原あえか著

『ドクトルたちの奮闘記：ゲーテが導く日独医学交流』

(慶應義塾大学出版会 2012年 280頁 ISBN 978-4766419504 2,520円)

小川 眞里子



本書はとくに女性医師を扱うことを意図した書籍ではないし、ましてそれをジェンダーやフェミニズムの視点から扱うことを意図したものでもない。著者はゲーテ研究を中心に日本をリードする中堅の研究者であり、本書は著者の言葉を借りれば「ゲーテを導きの糸として」、18世紀から19世紀にかけて活躍した日本とドイツの医師を扱った書物である。そしてその意味で十分な名著である。著者の文章の美しさや楽しさ、調査の徹底ぶりは、いずれもすでに定評ある著者の力量を示すものである。それにもかかわらず、敢えて本書をジェンダー研究センターの紀要で紹介したいと考えた理由は、著者が掘り起こした女性医師が「只者ではない」からである。そして彼女たち尋常ならざる女性が巡り会う社会的状況も興味深いからである。

本書の第4章と第5章でそれぞれ紹介される「只者ではない」女性医師は、高橋瑞子(1852-1927)と宇良田唯(1873-1936)である。これまでも彼女たちに関する先行研究はいくつかあり、著者もそれらを参照している。しかし、専門的な医学雑誌であったりして入手困難なものも少なくない。新しい単行本としては西條敏美著『理系の扉を開いた日本の女性たち』(新泉社 2009年)が、ちょうどこの二人の女医も取り上げているので、二つの著作の比較を挟みながらそちらも紹介しよう。二人の著述の一番大きな違いは、ドイツにおける高橋と宇良田の事績の有無である。それは著者石原の本領であるドイツの資料精査をまって初めて明らかにされたことである。本書の価値はそうした新たな資料に基づく勇気ある新しい女性医師像の提示にあることは間違いないが、さらに加えて女性医師を育てた彼女たちの周囲の男性医師や男性研究者の著述もジェンダー的視点から見て興味深い。第4章と第5章に先立つ第3章は長井長義に当てられており、彼の「ライフワークとしての女性研究者育成」をテーマにしているのである。先に述べた尋常ならざる女性に共通する社会的状況とは、具体的には彼女たちを押し上げてくれた男性医師や男性研究者の存在である。本書では長井の他に、佐藤進(軍医・順天堂医院長)や北里柴三郎が取り上げられている。

西條の『理系の扉・・・女性たち』では、全部で25名の理系女性を取り上げ、ほぼ半数が女医と助産師である。そちらはそれぞれの女性の故郷探訪記的な性格をもち、個々の女性の学問的事績についてはかなり省略されたままである。たとえば高橋瑞子のベルリン留学の経緯についてはわずか数行の言及でしかないが、一方石原は、ドイツにおける高橋の様子を第4章第IV節「順天堂病院での実習からドイツ渡航、医院再開まで」として17頁にわたって詳述している。宇良田の方も、『理系の扉・・・女性たち』では、「彼女は、細菌学者として知られる北里柴三郎の紹介状を持って、ドイツのマールブルグ大学に留学し、1905年33歳のとき、『クレード点眼液の効果に関する実験的研究』で、日本女性として初めてドイツの大学から医学博士の学位を授与されたのだった」とある。それも本書は第5章第III節「マールブルグ大学最初の女性MD取得者」として6頁にわたって明らかにしている。

そもそも西條の著作と石原の著作は目的が違うのでこうした比較は西條に気の毒で適切ではないかもしれないが、石原の現地に足を運び、実際に自分の目で確かめないと気が済まないという徹底ぶりは、きわめて顕著である。高橋のベルリンでの下宿の居所を突き止め、その界隈を歩き回る、宇良田の学位記謄本を含む書類に目を通し、例外的な女子試験候補生である宇良田には、男子の博論候補生の3倍程度の試験が課されていた事実まで突き止めている。もう一つ高橋について言えば、西條の方では高橋の墓にはお骨が入っていないかもしれないという郷土史家の言葉の紹介で終わっているが、石原は東京女子医大に出向き、高橋の骨格標本に直面してきている。それについては、本書の記述も然る事ながら、同じ著者による「高橋瑞子の骨格標本を眺めて」（『三田文学』105号 2011年）を、味わい深いエッセイとしてお勧めしたい。

さて、こうした著者の徹底ぶりは、必ずしも高橋、宇良田にとどまらず、ドイツと日本の幾人かの女性医師、研究者にも及び、本書に幅と奥行きを与えている。彼女たちのほかに本書で言及される女性医師は、ドイツ側でドロテア・クリスティアーナ・エルクスレーベン（1715-62）、ヨゼファ・フォン・シーボルト（1771-1849）、シャルロッテ・フォン・シーボルト（1788-1859）である。最初のエルクスレーベンは、ドイツで正規の医学博士（MD）を取得した女医で、非常に啓蒙的な父親の援助によって学問的基礎を得た。こうした父娘の関係は宇良田にも共通する。後の2名の女医は母娘の関係にあり、それぞれに夫であり父親であるダミアン・フォン・シーボルトの理解によって、ギーセン大学からヨゼファは名誉医学博士、シャルロッテは正規の医学博士を得ている。ここに登場したシーボルトは、長崎・出島に駐在したフィリップ・フォン・シーボルトも含めヴェルツブルクのエリート医学者一族で親戚関係にある。著者は、「女子の高等教育には、国王や学長・学部長など男性権威者の理解が必要である」（p. 137）、「女性研究者の育成には父権を持つ男性の影響が日本でもドイツでも大きい」（p. 183）ことを強調している。

日本側では、先のフィリップ・フォン・シーボルトの娘、楠本イネ（1827-1903）が西洋医学を修めた女医の第1号として、荻野吟子（1851-1913）が公許女医第1号として挙がる。しかし女医が育っていく確固たる基盤を準備した人物として著者は、公許女医第3号の高橋瑞子を挙げている。高橋は有力者の仲介ではなく、体当たりで交渉した結果として済生学舎を、医学を志す女性の誰もが学べる場所と成し、後進に道を開いたのである。1884年のことである。1900年にふたたび女性に門戸を閉ざした済生学舎に代わって、東京女医学校を設立したのが吉岡彌生（1871-1959）である。

アメリカでもイギリスでも最初期に医師になった女性はみな教育を受ける場がなくて苦勞しており、高等教育の制度化が重要であった。とくにイギリスでは1870年代になっても国外でMDを取得せざるを得ず、帰国後ようやく女医として遇されるようになる有様であった。私財を投じて1874年ロンドンに女子の医学校を設立したソフィー・ジュクスブレイク（1840-1912）は、1877年スイスでMDをとった。アメリカではこれより早く、1859年に女医の第1号であるエリザベス・ブラックウェル（1821-1910）が後進の育成に乗り出している。女子の高等教育の制度化には、苦勞を強いられた同性の先達の尽力が大きい。これに加えて、女性医師・研究者を育てる男性の尽力である。

本書もその如く、高い志をもって学問を究めようとする女性たちに救いの手を差し伸べた男性医師、男性研究者の存在に注意を促している。荻野吟子については有力者 石黒忠憲の紹介が助けになったが、著者は「維新後ドイツで医学を学んだ日本人男性たちが、・・・日本人女性の職業的自立や教育に少なからぬ貢献をした事実を見過ごしてはならない」（p. 80）、「日本の近代医学を先導した男性たちは、留

学によって母国の女性教育の重要性を意識させられたのだった」(p. 81) [文意が通るように原文をわずかに変更した]と述べている。そうした男性として著者が挙げるのが前述した、佐藤進、長井長義、北里柴三郎である。彼らのベルリン留学の期間はそれぞれ1869-74年、1871-84年、1885-92年である。しかし著者によれば、プロイセン（ベルリン大学を含む）で女子の正規学生が受け入れられるようになったのは1908年秋学期以降のことであるという。とすれば、彼ら3人がベルリンで留学生活を送ったときに、例外的な女子留学生はいたとしても、ロールモデルとなるような普通的女子学生がいたというわけではない。

佐藤進や北里柴三郎が高橋瑞子を助け、長井長義が優秀な門下生 黒田チカ（1884-1968）と丹下ウメ（1873-1951）を東北帝国大学に日本最初的女子学生として送り込み（1913年）、おそらくは北里が宇良田に紹介状を持たせたといった尽力は、彼らのドイツでの生活に起因するのかもしれないが、断定は難しい。高橋と宇良田の留学については、男性たちも自分の留学時代の苦勞を思い起こし、自然に援助の手を差し伸べるようになったかもしれないが、女性研究者一般へのエンカレッジという訳ではない。ただし当時としては珍しく精神的に自立した女性であった佐藤の妻志津、長井の妻テレーゼの存在は無視できないかもしれない。

女性研究者の育成にかけては、おそらく鈴木梅太郎も挙げられてよいだろう。彼は1917年（大正6年）に創設された財団法人理化学研究所に入り、本多光太郎・長岡半太郎とともに理研の3太郎として知られる立役者であるが、多くの女性研究者も育てた。この時代ともなると、社会的な背景として大正デモクラシーを挙げられよう。理研は今日も例外的に女性研究者の高い比率を誇り、その自由な研究気風は注目されてよい。イギリスでは、X線結晶構造解析分野で多くの優秀な女性研究者を育てたブラッグ父子（1915年ノーベル賞受賞）がフェミニストとして有名である。

女性研究者育成を個々の男性研究者の善意に帰してしまっては面白くなく、著者石原の主張はかなりの根拠をもつものとして今後さらに研究されてよいだろう。いずれにせよ、ゲートから発してこれほどの著作をまとめ上げた著者の力量には脱帽であり、科学史の不足部分が十全に補われたことを喜ぶたい。

これだけ情報盛り沢山の本書に人名索引すらついていないのは残念である。フォントを小さくして付与された注の情報量も並ではない。本文と注の両方に共通な索引が付けられたら、もっと利用価値が上がるであろう。なお、登場人物のスケッチを配した表紙は、美しさと共に可愛らしさ（たとえば黒田チカのお弁当）に心を動かされる著者の心情に似つかわしく思われる。

（おがわ・まりこ／三重大学特任教授）